

怒りと批判の獲得——現代社会における感情と正義

2008年5月

「ムカツク」「キレル」ということばが、現代人の感情生活を読み解く「キーワード」になって久しい。怒りは思いもよらない仕方で突発し、思いもよらない事態を引き起こす。この状態は蔓延し深刻化している。新自由主義的な社会政策が貫徹し、貧困と格差が顕在化し、生活の安定した部分や集団的なつながりが消え去り、各人の人間的成長が無視されようとするなかで、私たちは不安や孤独、困窮とたたかいながら、与えられた仕事やマニュアルにあわせた自己コントロールを余儀なくされている。そこに生まれるストレスは、著しく不分明であるがゆえに、外部との偶然の出会いのなかでしばしば怒りとして突発し、極端な場合には「誰でもいいから人を殺してみたかった」という事件にさえたちいたる。こうしたやり場のない怒りや憤懣は通常は私的なかたちで現れ、また内面にくすぶり続けるが、他方でストレートな社会や政治批判が難しくなっていることもあって、その鬱積は「いじめ」など隠微なかたちでより弱い者に向けられ、犯罪等へとエスカレートすることもある。そのことはまた、支配の側に社会管理の洗練・強化、社会的厳罰主義の徹底の格好の口実を与えている。今ようやく、こうした螺旋的悪循環が現代資本主義の病弊として社会的に再認識されはじめているが、問題はさらにそれを本質的、構造的にとらえ、より多くの人々の共通認識として押し広げることであろう。

とはいえ私たちは、「日本人はしんぼう強い」という声もよく耳にする。不安定雇用の常態化によって生存すれすれで働かされ、人間らしい生活も将来への希望も奪われた現実。競争や生き残りの掛け声のなかで生活や社会のあるべき姿の問い直しもままならず、その日その日を機械のようにやり過ごさなければならない現実。杜撰で、排除的で、残余的な福祉行政によって胎児から墓場まで不安に脅かされる現実……。これらを前にして「外国だったら暴動が起こってますよ」という発言にはそれなりのリアリティーがある。「外国だったら」は「かつての日本だったら」といいかえてよいかもしれない。このことは端的に、私たちの感情生活がいかに個人化されているか、怒りを公的なものへ結びつける回路がいかに断たれてしまったのかをよく物語っている。

周知のように、三木清はかつて「切に義人を思う。義人とは何か、——怒ることを知れる者である」（『人生論ノート』）と書いた。この場合「義人」は「正義の蹂躪された時」に怒る神のような、高貴な性格をもつ人間についていわれる。私たちにとって必要なものは神の怒りでも貴人のそれでもないが、怒りを正義の回復に結びつけ、公的な回路との接続を求める点で三木はまったく正しい。じっさい、そのような回路は歴史のなかに繰り返し存在してきたし、そのことによってたたかいが組織されて正義が実現し、多様な人間的諸権利が獲得されてきた。だが、新自由主義に導かれた現代資本主義はその回路を後退させることで、私たちの関係を物象化し、商品・貨幣関係として社会の隅々にまで浸透させ、商

品交換とは異なる論理や正義を社会から排除しようとしている。その影響力は、過剰競争を組織して生活を荒廃させ、私たちの労働を機械的なマニュアルの鋳型にはめて矮小化し、人間相互のコミュニケーションを自己顕示や他者利用の手段へと貶めている。加えて、「洗練」された知的、文化的、社会的メカニズムが、マス・メディアからセラピーにいたるまで、マクロおよびミクロのスケールで公的な義憤の制御に動員される。だが、幾層にも張り巡らされた分断・制御メカニズムが究極において社会の貧富への二極分解をもたらし、その衰退を加速させることが明らかになりつつある以上、怒りの公的な回路の回復に根本的な問題解決を求めることこそが、時宜にかなない正義にかなったものである。

とはいえ、このことは私たち自身の知的営為の自己吟味と無関係ではない。これまで良識の府として社会批判の一翼を担ってきた、大学や研究機関などがこの十数年の間に急速に荒廃・浸食されてしまった現状にかんがみると、そこからの脱出のためにも知の自己批判が問われている。これらの場では、向けられるべき怒りの矛先が政治家なのか官僚なのか、市場なのか国家なのか、個人主義なのか国家主義なのか、あるいは退嬰した知的状況そのものなのか、混乱のさなかにあるとっていい。だからこそ、批判的な知の課題はまず対象の複雑さや不透明さを解きほぐす不正義の典型に目を向けなければならない。とくに、貧困と不安に投げ込まれた社会層の拡大が提起する問題にリアルに、また真摯に向かいあうこと、さらに正義の回復にあたって視野を大きく広げて、国内外の事象から、また過去および現在の事象から得られる教訓を参照することが求められる。そのことがひいては、私たちによる希望の構想を、多様な仕方で可能ならしめる確かな出発点になるはずだからである。